

春さきの古物店

小川未明

青空文庫

ひろやかな通りには、日の光が暖かそうにあたっていました。この道に面して、両側には、いろいろの店が並んでいました。ちょうどその四つ辻のところに、一軒の古道具をあきなっている店がありました。そこに、各種の道具類が置かれてある有り様は、さながら、みんなは、いままで働いていたけれど、不用になったので、しばらく骨休みをしているというようなようすでありました。

どんなものが、そこにあつたかというのに、まず壁ぎわには、張り板が立てかけられてあり、その下のところに、乳母車が置いてあり、その横に机があり、その他、火ばち・針箱・瓶というように、いろいろな道具類が並べられてありました。

しかし、張り板と乳母車と机とが、いちばんたがいに距離が近かったものだから、話もし、また親しくもしていました。彼らは、このごろは仕事もないし、ただ空想にふけつたり、昔のことを思い出したりしているよりほかはなかつたのであります。

そのなかでも乳母車は、ちょうど腰の曲がつたおばあさんのように、愚痴ばかりいつているのでした。

「まだ、あなたは、その年でもないのに、なぜそう愚痴ばかりおっしゃるのですか。また、

これから世の中へ出て、どんなおもしろいめをしないともかぎりません……。」と、机はよく、乳母車に向かつていったことがあります。

すると、青いペンキのところどころはげ落ちた乳母車は、急に、元気づいた調子になつて、

「ほんとうに考えればそうなんです。けれど、こうして、じつとしていきますと、ついきがめいりまして、しかたがないもんですから……。」と、乳母車は答えました。

「ああ、もうじき春がくるよ。そうすれば、おれたちは、きつとおもしろいことがあるだろう。そう長いことでもあるまい……。」と、張り板が、身柄相応な大きな声を出して、口をいれました。

今日も、乳母車は、日のあたたかさうにあたつて、黄色なほこりが、人間の歩くげたのさきから、また荷車のわたちの後から起こるのを見えていましたが、いつしか、いつものごとく訴えるような調子で、

「わたしにも、おもしろいことも、おかしいことも、ありましたつけ。あれはどこだったろう。いい音楽の聞こえてくる坂道を、赤ん坊をのせて登ると、そこには桜の木が幾本もあつて、みごとに花が咲いていました。吹いてくる風は、なんともいえず気持ち

よかつたし、いつまでもその木の下で遊んでいました。もう一度あんなところへ行ってみたいと思います……。」

乳母車は、語るともつかず、ひとりで、こういつて、空想にふけていると、

「乳母車さん、あなたが、昔のことをなつかしがりなさるのも、無理はないが、だれにだつて、そうした思い出というようなものはあるものです。しかしそれがどうなるものでしょうか？」と、机がいました。

乳母車は、机のいったことは、耳にはいらず、なにかいっしんに沈んだ顔をして考えていました。

このとき、突然にも、壁に寄りかかっている張り板が口を開いたのです。

「机くん、君にも、なにかそんなはなやかな思い出があるのかね。君の姿を見たのでは、どんな虐待を人間から受けてきたかと思われるくらいだ。僕は、また君こそ、過去の苦痛の連続であつて、こうしてのんきにしていられるのが、どんなに君にとって幸福のことかおしれないと思つたが、やはり、昔が恋しいとみえるのは不思議なくらいだが……。」と、張り板はいったのでした。

机は、感慨深そうな顔つきをして、張り板のいうことに耳を傾けていました。

「そう思われるのは、無理はありません。この体をしては……。」といいました。
なぜなら机の四つ角は、小刀かなにかで、不格好に削り落とされて円くされ、そして、面には、縦横に傷がついていたのであります。張り板がその過去に、どんなひどいめにあわされてきたかと疑ったことに、すこしのふしぎもなかったからです。しかし、机はそのことについて語りはじめました。

「もと私は、なかなかりっぱな机でした。その時分、お嬢さまは、私の前にすわって、歌をお作りなされました。お嬢さまは、夏の山路という題について、秋の野原という課題について、虫や、露について、また雨にぬれた花などについて、どんなにかぎりない美しい空想を、私の前で読み、歌われたかしれません。そして、あるときは故郷を思い出し、では、悲しいやるせない、それは、私には、あまり微妙でいいあらわせないような、もつとも尊重されなければならぬ感情を、私にばかり、惜しげもなく見せられたかしません……。このことは、あなたたちには、まったく、想像のつかないことです。」
といいました。

「それなのに、なぜ君は、そんなかたわ者にされたんだね。」
「まあ、聞いてください。お嬢さまが結婚なされたときに、私もいっしょに、お伴をし

てまいりました。どうです、私は、それほどのお氣にいりであつたのでした。そのうちに、坊ちゃんが生まれましました。坊ちゃんが三つするとき、なにかのはずみにあやまって、私の角で頭をお打ちになつたのです。すると、氣の短い主人は、なにか私が悪いことでもしたように誤解されて、前後の考えもなく、腹だちまぎれに、私の四すみの角をみんな小刀で削り落としてしまわれました。そのときから、私は、こんなかたわ者になつたのです。それからというもの、私は、なにかにつけて手荒く取り扱われましたが、しまいに、大きくなつた坊ちゃんのために、またこんな面にまで傷をつけられてしまいました。しかし、それまでの、長い間の榮華な生活を思い出せば、私は、しあわせのほうで、なにも、うらむことはないのであります。」と、机は答えました。

張り板は、なんと思つたか、あざ笑いました。

「あなたが、こんなように、角を削り落とされずにいたなら、ここへは、まだおいでにならなかつたでしょう……。みんな、運命というもんでしょうね。」と、乳母車がいいました。

「うらむ、うらまないといつて、もう二度と君は、榮華の日を見ることはあるまい。」と、張り板がいいました。

「ほんとうに、あのとき、坊ちゃんがころんで頭を私の角で打ちさえしなければ、こんなことにはならなかったのです。」

「わたしも、やはりそうなんです。引越しのときに、私の小さな体では、無理なほど重い、大きなものを積み重ねられましたので、そのとき、体の具合をいけなくしてしまったのです。もうすこし、私の身を思ってくれたらと思いますが、今となってはしかたがありません。また、そのうちには、いいこともないとかぎりますますまいから……。」と、乳母車はいいました。

「そうだ。おまえさんなどは、そうおいぼれたばあさんでもないから、春になったら、どこへか売れ口がないものでもない。」と、脊高な、口だけは達者であるが、そのわりに能のなさそうな張り板はいつたのです。

「張り板さん、あなたはどうなんですか。私どもから見れば、あなたは、しごく、のんきなように見えませんが、それでも苦勞はありますか。」と、机は、張り板に向かって、たずねました。

「おれには、なに、苦勞なんかあるものか。おれみたいに、みんながのんきに暮らしていれば、べつに悲観することもないのだ。せま苦しい家の中にいるときはべつだが、いつも

天気てんきのいい日は外ひに出て、通とおる人間にんげんをながめたり、あたりの景色けしきをながめているのさ。病びようき気きをしてみたいと思おもつても病びようき気きのしようがないのだ。」

「それで、退たいくつ屈くつはなさいませんか？」と、乳母車うぼぐるまがやさしい声こえできいたのです。

「元がんらい来らいおれなどは、怠なまけ者ものだから……なにを見みてもおもしろいね。とんぼの飛とぶのを見みても、犬いぬがけんかをするのを見みても、子こども供もが輪わをまわして遊あそぶのを見みても……。だから、退たいくつ屈くつはしたことがない。」

「そうでございますか。」

「ここで、こうして、おたがいなかに仲なよくなつたのですから、たとえここを出でてしまつても、おたがいに幸こう福ふくに日ひを送おくりたいものですね……。」と、机つくえが、いまさら感かんじたらしくいいました。

「ほんとうに、そうでございます。いつまたみんなが、一つところに落おち合あうことでございませう?。」

「いや、もうけつして、落おちあうことはありますまい。」

このとき張はり板いたは、からからと笑わらいながら、

「だれに、明日あすのことがわかるもんか。しかし、悪わるくなつたつて、よくなりつこはないだ

ろうな。なぜつて、こうして、骨休ほねやすみをしている楽らくにこした、楽らくはあるまいからな。机つくえくんなどは、こんど働はたらきに出でれば、きつと重いおもものの台だいにでもなるだろう。そうすれば、いつしうう一いつしう生う浮かぶ瀬せがない。乳母車うばぐるまさんだつて、どうせ楽らくな日ひはありっこない。まあ、こうして、一日いちにちでも長ながくいられるにこしたことがない……。」といいました。みんなは、なるほどそうかなと考かんえられたのです。

一日いちじつ、客きやくがこの店みせにはいつてきました。主人しゅじんは、なにかその客きやくと話はなしをしていました。張り板は・机いた・乳母車つくえは、めいめいに自分じぶんが買かわれてゆくのでないかと、胸むねをどきどきさせていました。それは、不安ふあんなうちにどこか明あかるい希望きぼうのあるような感かんじでもありました。そのうちに、主人しゅじんは、一方ほうのすみの方ほうから、手てを延のばして、あまり大おおきくないものをつかみ出だしました。みんなは、それがなんであるかと目めを向むけますと、鼻はながねずみに食くわれて欠かけていた、古ふるいひな人にんぎよう形かたでありました。いつか、みんなは、この人にんぎよう形かたが仲間な間かま入いりをしたときに、大おおいに笑わらったものです。その後ご、その存ぞん在ざいすら忘わすれられていたのです。客きやくは、どういうつもりか、その人にんぎよう形かたを買かってゆきました。

店みせさきが、ふたたび静しずかになつたとき、みんなは顔かおを見合みあわせて、いまさら運命うんめいというものの不可思議ふかしぎを考かんえさせられたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「赤い鳥」

1926（大正15）年3月

※表題は底本では、「春《はる》さきの古物店《こぶつてん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春さきの古物店

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>